

LTD（話し合い学習）の活用と双方向授業の展開による 読解力・解釈力向上の試み

An Attempt to Improve Reading Comprehension and Interpretation Skills through Interactive Lessons and LTD (Learning Through Discussion)

山中正樹
創価大学文学部

Abstract: This study presents a method for creating a class for students to read, think, and express their opinions to each other independently. In this method, the author arranged a LTD (Learning Through Discussion) session to facilitate the students' reading comprehension of literary works. Through the introduction of LTD, it became possible to develop classes where students constructed their own "interpretations" and enhanced these interpretations. ICT (Information and Communication Technology) was utilized to ensure that LTD functioned effectively. By using the school's portal site, the students could reflect on the "learning" they had acquired during class, share the content of group discussions, and freely express their own views. It was concluded that combining ICT with LTD facilitated more active and practical learning in students.

Keywords : Literary Education, LTD, Interactive Lessons, ICT

1. はじめに

(1) 問題の所在

中・高の国語科教育において文科省は、〈表現活動〉の重視と「単元を貫く言語教育」を推進してきた。さらに、近代日本文学研究における〈文学（教育）否定〉論とそれに呼応する〈カルチュラル・スタディーズ〉隆盛は、国語（文学）教育の現場から、作品を丹念に読み、解釈するという活動を放棄させた。

教室では、どのような奇怪な〈読み〉も受け入れられる「ナンデモアリ」という混乱が続いて来た。そこでは表面的な語句の意味を追うことに終始し、文章の内容を深く捉えることをせず、自分の理解の範囲の中でしか、ものを考えないという悪弊が横行する^[1]。それは大学入学後の多くの学生にも共通して見られる特徴だと思われる。

(2) 教育改善の目的・目標

学士課程教育においては、「〈21世紀型市民〉の育成」が求められ、学生の主体的能動的学習への取り組みと、世界に発信できる表現力の涵養が求められている^[2]。

本稿では、如上の文学・国語教育をめぐる困難を克服し、「学士課程教育」が目指す、「学問の基本的な知識を獲得するだけでなく、知識の活用能力や創造性、生涯を通じて学び続ける基礎的な能力」を持ち、「多様化・複雑化する課題〔中略〕に直面している現代の社会を支え、よりよいものとしていく責任を果たす、自立した市民」育成の一助として、学生が主体的に読書し思考し、意見を述べ合えるような〈読解〉の授業を構築するための一つの方途を示したい。

(3) 科目の概要

本稿での授業実践は、論者が担当する「日本文学入門」において試みたものである。こ

Masaki Yamanaka
Soka University
E-mail: yamanaka@soka.ac.jp

(受付：2014年10月4日、 受理：2014年11月6日)

これは、論者の勤務校では全学1～4年生共通の基礎教育科目として位置づけられており、後期2単位として設定されている。学生は例年50名程度（ただし卒業単位の単位算定にかかる履修規定の改訂もあってか、2013年度は23名であった）。教室には、各学部からの多様な学生が混在しており、文学（作品）への興味・関心や日常の読書の分野および読書量などもまちまちである。

2. 教育改善の内容と方法

(1) 改善したい内容

これまでの文学教育の授業では、学生は概ね教授者の解説を一方向的に聴取する形のものが多いのであつたらう。逆に学生が自分の意見を述べるタイプの授業では、自由な発言を重視するあまり、皮相的な主張のみが横行し、作品を深く精緻に捉える営為は求めづらいう傾向にあつたのではないか。このように文学教育、なかんずく文学作品の〈読み〉をめぐる授業では、「コレシカナイ（一方的知識伝達）」か「ナンデモアリ（無秩序な意見表出）」という両極端な教室運営しかされてこなかったと国語教育の専門家は指摘する¹³⁾。

ただでさえ、学生にとっては難解とされる文学作品に「興味を向けさせ、作品を丹念に読ませ、自分自身の意見（読み）を構築させ、他者との解釈の違いを考えさせる」にはどうしたらよいか。この点に、これからの文学教育の枢要があるのではないか。しかしそれは、文学・国語教育の分野だけの問題にとどまるものではない。

本研究で実践する学習活動は、諏訪哲二が指摘する、自分の価値観のみを是とし、自分にとって都合の悪い現実を消し去ろうとする

「オレ様」化した若者¹⁴⁾の意識を、より広い次元に開いていく契機になるだろうと期待できるのである。

諏訪は、80年代からみられる「教師に喫煙を現認されてもシラを切り通」したり、「授業中の私語を注意する」と「逆切れ」する「新しい子どもたち」を、「オレ様化した子どもたち」と命名した。その原因を諏訪は、子どもたちが「自己が自己である確信」を「私が私である感情的根拠」、すなわち自分にしかわからない「私そのもの」といった感情や確信に求めているからだと分析する。ここから脱却するには、他者の「私そのもの」を可視化し、自分の「私そのもの」と相対化させるしかないのではないか。そのために〈文学教育〉の果たす役割は非常に大きいと論者は考える。なかでも〈読解〉や〈解釈〉を行う学習活動は、対象となる作品と自己の関係が必然的に問われるわけだし、同じ作品をめぐる自他の〈読み〉の違いを意識せざるを得ないからだ。問題は、〈文学（国語）教育〉の現場で、それをどう展開するかである。学生に興味を持たせ、主体的に授業に参加させるにはどうしたらよいか。本稿で報告するLTDとICTを組み合わせた授業改善の有効性は大きいと考える。

(2) 改善の方法

授業改善は、具体的にはLTD（Learning Through Discussion・話し合い学習）¹⁵⁾を、文学作品の読解のために筆者がアレンジした手法を用い、そこにICTを取り入れた。

本来LTDは学生の活動を主体とし、教授者がそこに介入することは行わない。しかし文学の〈読み〉の授業では、教授者が関与しないことで、先に見た「ナンデモアリ」の状況

に陥ってしまう恐れがある。そこで本授業改善では、グループ討議で議論が停滞した場合には、教授者が適宜アドバイスを与えることとした。

ICTの活用としては、本学ポータルサイト⁽²⁾を利用して、授業後の「振り返りシート」の提出、教材の閲覧、ポータル上の「授業フォーラム」の活用などがあげられる。これにより、一人ひとりの学生の解釈や意見を受講生全員で共有することや、授業時間以外での自由な意見交換の場を創出することなどが可能になった。

このようにLTDにICTを組み合わせることで、LTDの活動を有効に機能させ、さらに能動的・発展的学習の可能性を探ることができたと考える。

(3) 学習活動の具体的内容と工夫

学生は、毎回指定された教科書の作品を授業前に熟読し、予め示されている作業項目に従って「予習課題」(図1)を作成し授業時に持参する。それをもとに、グループ毎に作品内容の理解や主題・解釈をめぐる議論を行う。

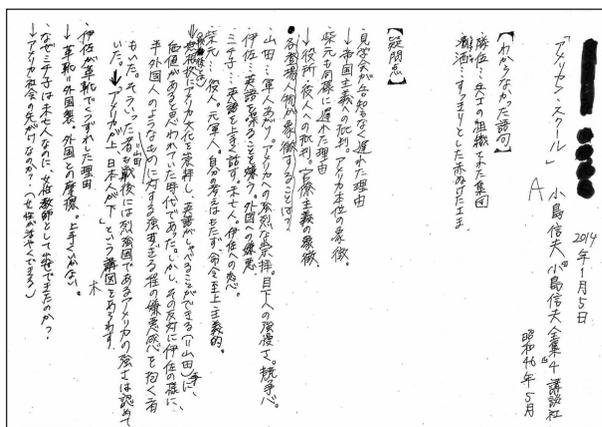


図1 学生が作成した予習課題の一例

議論の内容は授業終了時に、各グループの代表者が全体に発表し共有する。また授業後、グループ討議の内容や学生自身の作品解釈の深化などを「振り返りシート」(図2)にまと

め、ポータルサイトを通じて提出させる。さらに「振り返りシート」のコメント部分(図3)を集約してサイトにアップし、学生全員が閲覧・共有できるようにした。学生はこれに目を通して翌週の授業に参加する。一方、ポータルサイトの「授業フォーラム」に学生は自由に書き込み意見交換できるようにする。

(Learning Through Discussion 振り返り) 文学: 日本文学入門(山中正樹)

学籍番号: _____ 氏名: _____ 日付: 2013年 1月 7日(火) 第3時限
 (所属グループ名 No. 第2グループ)

本日の教材 作者: 小島信夫 作品名: 「アメリカン・スクール」

★事前調査 もっとも当てはまる数字を、次の中からひとつ選び、()に記入して下さい。
 全く(違う) どちらでもない とても(その通りだ)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

1、(3) あなたは、この作品に興味をもちましたか?
 2、(4) あなたは、この作品の内容を理解できましたか?
 3、(4) 本日の予習は、十分にできていましたか?

★事後調査 もっとも当てはまる数字を、次の中からひとつ選び、()に記入して下さい。
 全く(違う) どちらでもない とても(その通りだ)

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

1、(4) あなたは、今日の話し合いに十分参加できましたか?
 2、(4) あなたのグループは、積極的な議論ができましたか?
 3、(4) 今日のグループでの活動を通して、新たな発見や学びがありましたか?

★まとめ グループ討議を通しての、気づき・学び・事前の(読み)から変化したことなどを記入して下さい。

今回のLTDを通して、テキストを読み解くことの重要性を学んだ。
 アメリカン・スクールのテキスト、話の筋道自体はなんのこともない日本人英語教師の見学会に向かう道中のささいな人間模様やトラブルであり、事件性としてはそこまで大きくない。しかし、登場人物一人ひとりが象徴的なもの、心のうちに抱く心情は、戦後日本の「劣等感」と「自尊心」を巧みに表現していて、深いある作品であることが理解できた。
 伊佐が抱く屈折した「英語=戦勝国・米国」に対する思いは、強烈な行動となって表現されている。こんな人物は小説上の人物であって、実際にはいないだろうと思っていたが、自身の経験からも日本人全体の心に伊佐は存在しているだろうとくじする。私は、昨年NYに語学留学していた。よくまわりの人々からなぜアメリカ・NYを選び英語を学んだのかを聞かれるが、私にとっては、なんのこともなく当然のようにNYであった。語学を学ぶなら英語だ、英語を話せることはどの言語を話せるよりもかっこいいという先入観と、アメリカへの強い憧れ、東京以上の大都会、文明への強い憧れがあったのだ。非常に短絡的思考であるが、当時の私の脳内(白紙の私)には、そのような思いがデフォルトで存在していた。
 その思いを戦後当時に深く感じ、挿絵し、小説としてえぐりだした本作は味わい深いものである。

※用紙が足りなければ裏へ記入しても構いません。授業(グループ活動)についての感想や作品に関する疑問なども裏面に。ただし裏面(この面)の末尾に「ウラへ(つづく)」「裏面に疑問有り」などと明記して下さい。

図2 学生が提出した「振り返りシート」

★まとめ グループ討議を通しての、気づき・学び・事前の(読み)から変化したことなどを記入して下さい。

一番大きく変化したこととしては、この作品をどうとらえるかだ。私は、グループ討議の前までは、ただ単に悲しい何とも言えない気持ちだけを感じていたように思う。やはり、普通に読むと、戦争犠牲者の悲しいお話としか見ることができないと思う。しかし、今回の授業を通して、「生きる強さ」や「希望」、そして単純に同情するだけではいけないなどの、他の視点からこの作品に対して向き合えるようにならなければならないように感じた。
 また、「強」ではなく「解」がこの作品内で用いられた場合どうなるのか、を考えることで、また違った視点からこの作品に向き合うことができ、新たな発見があるのかもしれないことも知ることができた。まだ考えていないが、時間があれば考えてみたい。
 加えて、個人的には、グループ討議でも話し合ったが、なぜ強の幕ではなく「火垂るの幕」なのかを明確にしていきたい。作品名を「火垂る」とすることで、何を伝えたかったのか、また、どのような想いが含まれているのかを、今後更に突き詰めていきたい。

図3 「振り返りシート」のコメント(部分)

3. 教育実践による改善効果とその確認

LTDの活動により、学生には文学作品の内容を知りたいという欲求が生まれ、さらに深

い〈読み〉を求める知的好奇心もいにくようになったと思われる。これは授業後に提出される「振り返りシート」の記述内容から判定できると考える。

授業前に「A. この作品に興味がありましたか」との問いと、授業後の「B. グループでの活動を通して、新たな学びや発見はありましたか」という問いへの回答を比べてみると、全体に「A」の低い評点（1・2）が減少し、「B」では、より高い評点のほうへシフトしている（図4）。このことは、グループ活動が刺激的で実り多いものであったことを示していると考えられる。

作品名/評点	A.作品への興味(事前)					B.グループ学習の学び(事後)				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
武蔵野	1	2	1	3	1	0	1	3	3	1
十二月八日	1	1	2	6	8	0	0	4	6	8
マリアン	0	0	6	3	4	0	0	2	2	9
祝といふ男	1	2	3	4	4	0	1	3	6	4
火垂るの墓	1	2	3	4	4	0	0	0	5	9
アメリカンスクール	0	0	4	5	3	0	0	4	6	2

(無) ← → (有) (少) ← → (多)

図4 「振り返りシート」の評価点

このように、他の学生の多様な解釈の存在を知ることによって、学生自身の〈読み〉の更新が促されたのではないかと考える。例えば、「図3」であげた学生のコメントにも、「一番大きく変化したことは」「私はグループ討議の前までは～だけを感じていたように思う」「しかし今回の授業を通して～ように感じた」などと記されており、授業の前後で、学生の解釈は変化・深化していることが窺える。

「振り返りシート」のコメント欄の自由記述で「授業を通して作品の読みが深まった」という趣旨の内容を記入した学生は（シートの述べ枚数 79 枚中）「15 枚（名）」。「グループ活動が充実していた」という趣旨の記述は（同）「54 枚（名）」にのぼる。

また学生は、グループ討議の内容のまとめ

や感想・質問やそれへの回答などを、自由に「フォーラム」に書き込むことができる（図5）。これを翌週の授業時まで全員が閲覧共有し、授業冒頭の全体討議に活用した。またクラスでの全体討議の前に、「振り返りシート」から優れた内容のものを教授者が紹介し、問題を焦点化して全体討議に臨んだ。ポータルを利用した「振り返りシート」の提出、またその内容や「フォーラム」での議論を学生が事前に閲覧し共有できたことが、議論の活性化につながっている。

山中 正樹 (担当教員) 投稿日時: 20xx/10/20 18:52

○君の質問, いいですね。
 明日の授業で考えましょう！
 ほかの皆さんも, どんどん書き込んでくださいね。

○○ ○○ (1201xxx) 投稿日時: 20xx/10/20 17:14

Bグループの○です。
 Cグループのまとめを読ませていただきました。
 自分たちのグループとは違った角度で物語が捉えられていて, とても興味深かったです。
 質問なのですが, 女性が渡辺に対して「皮肉」を込めて, フランス語の言葉を発したと言うところがありますが, それは, どのような思いが込められた皮肉なのでしょう？
 少し気になったので, お答えいただければと思います

図5 「フォーラム」書き込みの一例

LTDによる学生の能動的な文学作品への関わりの促進を、ICT導入によってさらに広げることができたのではないかと考える。実際にLTDのみを導入した2012年度の学生に比べ、LTDにICTを加えた2013年度の学生のほうが、授業への参加態度は、より積極的になった。これはまず「予習課題」の内容が前年に比べ質的・量的に向上したこと。さらに「振り返りシート」の記述に、「フォーラム」で問題化されたグループ討議の内容に対する応答な

どもあり、それが翌週の全体討議に活かされたことから確認できると考える。

またICT導入の効果は、授業評価アンケート結果の比較からも判断できるのではないだろうか。「この授業はよく準備されていたか」という問に対する回答は、12年度が5点満点中4.59ptであったが、13年度は4.80ptに向上、さらに「知的好奇心が高まった」は92.6%→100%、「学習意欲が増した」は51.9%→70%と向上している。

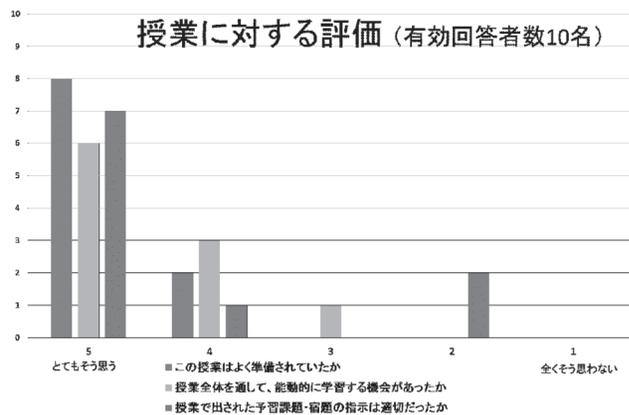


図6 授業評価アンケート1

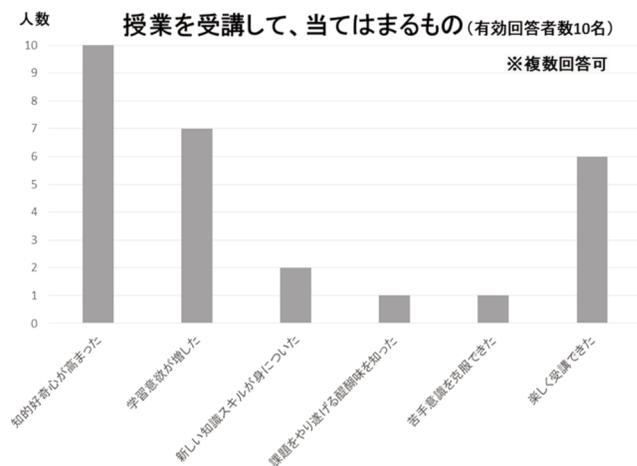


図7 授業評価アンケート2

このようにLTDの導入による動機付けと能動的取り組みが、ICTを活用することによって授業後も継続し、学生にさらに高いレベルでの興味や関心を引き出す契機となったのだと考える。

4. 結果と考察および今後の課題

LTD導入以前の授業では作品の表面だけを読み、浅薄な理解を示していた学生が、事前の予習課題の作成を通して作品に真摯に向き合い熟読し、自らの〈読み〉〈解釈〉を構築しようとする姿勢を持つようになった。そしてLTDの活動を通して、グループのメンバーと意見を交換しあい、作品の内容や、自分と他者の〈解釈〉の異同をめぐって活発に議論できるようになった。

これに加え2013年度からは、ポータルサイトを活用した学生自身による自己の学習の「振り返り」と、「フォーラム」を利用したグループ討議の内容の共有とお互いの意見交換の場の創出。これらによって学生の能動的学習が、授業後も継続できたのだと考える。授業評価アンケートで回答者の7割が「学習意欲が増した」と答えているし、6割が「楽しく受講できた」と答えているのも、そのことをあらわしているだろう。

なによりも、学生がお互いの多様な解釈に触れ、それを共有することで、より深く作品の内容や文脈を捉え、自他の意識の違いを認め合い、互いの優れた点を評価しあえるようになったのではないだろうか。

これらの改善効果は、前節で触れたように、「予習課題」および毎回の授業時のグループ討議の内容の質的向上や、授業後に提出させる「振り返りシート」への記載内容の深化と数値、および学期末レポートの質の向上と、先に紹介した「授業評価アンケート」の数値向上からも確認できたと考えている。

ただ、今後さらに改善していかなければならない課題も存在する。今回の授業改善でも、必ずしも学生全員が能動的に学習に取り組めたわけではない。予習課題作成に積極的でない

学生、話し合いにあまり参加できない学生も何名か存在した。また、「フォーラム」にもほとんど書き込まない学生もいた。授業や学習活動に対し消極的な、こうした学生の興味をいかにしたら引き出せるか。どうしたら彼らをこれらの活動に積極的に参加させることができるか。

また13年度は「フォーラム」の管理を論者が行ったが、双方向・同時的なICTの特性に鑑みれば、学生自身に「フォーラム」の運用を任せることで、授業以外での学生の活動はさらに広がり、より主体的な取り組みも可能になるのではないか。ICTの活用によって学生の学習意欲をさらに拡大していけるよう、今後も改善していきたい。

謝辞

本研究では、創価大学学士課程教育機構の山下由美子講師より、LTDの解説と授業モデルの提供を受けた。また論者の文学教育向けLTDアレンジ・モデル作成に際し、同講師より助言を得た。記して感謝したい。

注

- (1)LTD話し合い学習法は、主体的で能動的な学びを実現するための、協同を基盤とした実践的な学習方略である。八つの過程プランと協同の精神に裏打ちされた予習とミーティングを繰り返すことにより、読解力・批判的思考力・要約力の育成、また、話し合いを通して自己表現力・対人関係スキル・多面的思考の育成が見込まれる。^[5]
- (2) 論者の勤務校のポータルサイトでは、シラバスや授業計画の閲覧をはじめ、教員がアップした教材のダウンロードやレポートの提出などを行うことができる。また「授

業フォーラム」では、設定されたテーマに従って、学生も教員も自由に意見を書き込んだり、お互いの書き込みに対して質問したり意見を述べ合うことができる。

参考文献および関連URL

- [1] 府川源一郎: 私は文学教育をどのように考えるか—学習方法をめぐる私的メモ—。日本文学, 日本文学協, 1999.
田近洵一: さまよえる教室の〈読み〉。日本文学, 日本文学協会, 2010.
- [2] 中央教育審議会大学分科会 制度・教育部会: 学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)。pp.7-8, 2008.
- [3] 須貝千里: 〈第三項〉と〈語り〉, ここから始まる。—「まえがき」として—。
田中実, 須貝千里編: 文学が教育にできること—「読むこと」の秘鑰—。教育出版, pp.3-11, 2012.
- [4] 諏訪哲二: オレ様化する子どもたち。中公新書ラクレ, 2005.
- [5] 安永悟: LTD話し合い学習法。大学教育と情報, 私立大学情報教育協会, 2011年度 No.3, 2011.
http://www.juce.jp/LINK/journal/1201/pdf/02_01.pdf (2014年7月15日参照)